

現在をたくされた私達の義務

県立開邦高等学校 二年
仲里 茜音

空と海が青く澄みわたる沖縄。しかしここで七十年前、空からは鉄の雨がふり、地上には血の海が続いた。誰もが希望を失くし、明日をあきらめたあの日をこれから先、一体誰が語り継いでいくのだろうか。

六月二十三日、それは決して戦争が終わった喜ばしいものではない。この日はかつて地上戦で指揮をとっていた第三十二軍司令官牛島満大將をはじめとする司令部が自決した日である。しかし戦場にいた兵士はそのことを知らず闘い続けていた。戦争は終わることはなかったのだ。後に沖縄戦は「本土の時間かせぎの戦争」とも言われるようになった。お国のため、家族のため自らの命を犠牲にして戦い消えた者達の思いは何だったのだろうか。涙を流し、命を捧げていった人達からは私達の現在はどう見えているのだろうか。次の戦争を知らない世代の子供達へ誰が彼らの思いをつなげていくのだろうか。

私達はいつの時代でも平和を叫んでいる。

昭和二十年八月十四日、日本政府がポツダム宣言を受諾した。そして昭和二十年八月十五日、玉音放送より、日本の降伏が日本中に響き、知れわたった。そして日本の戦争は終わった。しかし、現在もお私達は届かぬ声を胸に戦い続けているのではないだろうか。

オスプレイ、基地移設。

私達は平和の中にいると同時に、常にあの日から被害者でいるのだ。そしてそれが当り前になってきている。私達の島に居続けている基地をただ傍観している人は、「仕方がない。」と考えている人が多いのではないかと感じる。沖縄の美しい海や空が奪われ、返される事もないまま「仕方がない。」という言葉で終わってしまうのだ。私達はいつの時代でも平和を叫んでいるはずだ。しかし、「国民の大多数が幸せであり続けるために犠牲が必要だ。」というのであれば、私達の戦いはあの頃から終わる事はないだろう。

私達は平和の中にいる事に慣れ、全ての事を「当たり前」で片づけるようになっていく。戦争が私達の現在にないのも、戦死者達の思いをつないでいくか

らだ。「お国のため、家族のため。」明日を生きれなかった者達の希望と未来が私達にたくされているのだ。戦争の残虐さや悲しさ、それらを知らない子達が今この瞬間にも生まれ育っている。いつまでもきれいな空に飛んでいる戦闘機を傍観し、爆音や銃声に耳をふさいで毎日を生きている。私達はいつまでも被害者でいるためだけに現在をたくされたわけではない。私達は戦死者達の思いの伝承と現在を変える義務があるのだ。

六月になると、学校では毎年平和学習が恒例として行われる。しかし、そこで学ぶものは幼かった私にとって、遠い過去のものでしかなかった。おそらく多数の人はそう思っているだろう。平和の礎を眺め、ただただ他人事のように思っていた私をそこに眠っていた二十万もの命はどう思っていただろうか。私の家で戦争体験者は祖母一人だけだった。祖母はいつも平和学習から帰ってきた私に「戦争は暗い。もうこんなに月日が経った今でも私の心はむしばまれている。あの暗やみからおばあは逃げられん。」とつぶやいた後にいつも空を見上げていた。祖母は戦争についてはこの言葉しか話そうとしなかった。口数は少ない祖母だったが平和を望んでいた人だった。戦争に対して無関心だった私に祖母はいつも寂しそうな顔をしていた。祖母が繋いだ未来をたくされた私の無関心が祖母を傷つけていたのだ。私のような無関心な人達が今ある平和を崩すことがあるのだ。私達は義務を担うと同時に無関心という壁をのりこえなければならぬ。

これからを繋いでいく私達。辛い悲しい戦争を他の誰でもない私達が繋いでいかなければならない。祖母は最期の時まで戦争から逃れられずに亡くなってしまった。私は祖母の思いをこれから繋げていかなくてはと思う。今、私はまだ高校生であり、周りに支えられながら多くの事を学んでいる。私達高校生に出来る事は限られているかもしれない。しかし情報にふり回され、私に見えている視野はせまいとしても、その中で精一杯沖縄のために出来ることをしていきたい。

私達の戦いは終わらない。私達は伝承と現在を変えていく義務がある。この義務から目をはなさず、無関心という名の壁を壊し戦死者たちの思いを次の世代へ伝えていきたい。